片倉佳史の台湾歴史紀行　第三回

高雄　(3)―旗山と高雄近郊の都市を訪ねる

片倉　佳史（台湾在住作家）

台湾南部最大の都市として君臨する高雄市。世界でも屈指の港湾都市であり、産業都市としても名を馳せている。2010 年 12 月に旧高雄県と合併し、現在、高雄市全体では人口約 278 万を誇り、台南と合わせ、台北に次ぐ都市圏を形成している。今回は高雄郊外の地域を紹介してみたい。

岡山～軍事都市として整備された町

岡山　カンサン（台湾華語・北京語）
岡山　かんさん（ホーロー語・台湾語）
岡山　おかやま（日本統治時代の呼称）

郡役所の所在地

岡山（おかやま）は高雄の北側に位置する町で、台南との中間地点にある都市である。もともとは高雄県岡山鎮（鎮は台湾の行政単位で町に相当）として、高雄市とは別個の都市だったが、現在は高雄市の管轄下にあり、同市の岡山区となっている。

この町の歴史は古い。小さいながらも地域の中枢となっており、賑やかさを誇っていたという。かつては「阿公店」を名乗っていたが、1920（大正 9）年の地名改正で「岡山」となった。

日本統治時代、台湾南部には高雄州が置かれていた。高雄一帯から現在の屏東県を合わせた広範な地域を管轄しており、帝国最南端の地である鵝鑾鼻（がらんび）を含んでいた。州内には岡山のほか、鳳山（ほうざん）、旗山（きざん）、屏東（へいとう）、潮州（ちょうしゅう）、東港（とうこう）、恒春（こうしゅん）の各郡を擁していた。

岡山郡については岡山街を中心とし、楠梓（なんし）、燕巣（えんそう）、田寮（でんりょう）、阿蓮（あれん）、路竹（ろちく）、湖内（こない）、弥陀（みだ）の各庄があり、郡役所が全体を管轄していた。昭和 17 年時の人口統計では、岡山郡の人口は 15 万 9471 名となっていた。

外省人が多く暮らしている都市

この地域は嘉南平原の南端部に当たり、区域全体が海抜 100 メートル以下の平野となっている。そのため、日本統治時代はさとうきびの栽培、現在は稲作が盛んな土地となっている。かつては見わたすかぎりのさとうきび畑の様子がこの地域の象徴的景観として知られていた。

同時に、岡山は軍事都市としても知られていた。海軍航空隊が置かれ、1939（昭和 14）年 12 月 1 日には飛行場も設けられた。これは翌年に軍用飛行場となり、帝国南方を護る拠点として機能した。戦時中は米軍の空襲によって大きな被害を出したが、滑走路などは中華民国空軍に接収され、現在も使用されている。

また、戦前に建てられた将校用の官舎なども残っており、独特な集落景観を誇っている。こういった家屋は戦後、本土へ引き揚げた日本人に代わり、中国大陸から渡ってきた幹部将校が住むようになった。また、下級兵士たちも多く台湾に来ており、各地に眷村と呼ばれる軍人集落が形成された。岡山近辺にもこういった集落は多く、他地域に比べ、外省人比率の高いエリアとなっていった。

神社の「神輿」が残されている廟

市街地のはずれには神社が設けられていた。こ

写真１　岡山名物として知られるヤギ肉料理。四川省出身の外省人が持ち込んだ「豆板醤」も岡山の名物とされる。ヤギ肉は「羊肉」と記すのが一般的。

写真２　岡山駅に置かれていたスタンプには「台湾」という文字が入っている。言うまでもなく、日本本土の岡山駅との混同を避けるためのもの。

れは岡山神社と呼ばれ、祭神には天照皇大神、明治天皇のほか、大国魂命、大己貴命、少彦名命、北白川宮能久親王を祀っていた。鎮座式典は1935（昭和10）年12月9日に挙行されたという記録が残っている。当初は無格社だったが、1942（昭和17）年1月24日に郷社に昇格している。

戦時体制下、台湾では各地で人々のアイデンティティを日本人に仕立てていく「皇民化運動」が推進されていた。神社の創建もこれに連動しており、同時期に設けられた神社は例外なく規模が大きかった。これは多くの参拝者が訪れることを想定したためで、岡山神社も新たに公園を設け、これを神苑に見立てた上で神社を設けたという力の入れようだった。

現在、神苑は中山公園となっている。戦後に統治者として君臨した中華民国政府は台湾に日本の痕跡が残ることを嫌い、さまざまな形で排日政策をとった。神社はすべて廃社となり、中には撤去されるだけでなく、意図的に碑文を削ったり、資材が持ち運ばれたりするところもあった。岡山神社の場合も例に漏れず、荒れるに任されていた。神社の名も消滅し、神苑は中華民国の国父である孫文の号に合わせ、中山公園となった。

公園の入口には鳥居が残っているが、上部は取り払われており、完全な状態ではない。鳥居は朱色に塗色されており、表側には「中山公園」、その裏側には「天下為公」の文字が記されている。

ここからかつての参道を歩いていくと、奥に壽天宮という廟がある。ここは1712年に台南天后宮の媽祖像を分霊したという古刹で、岡山で最も歴史のある廟となっている。もともとは市街地の中心部にあったが、日本統治時代の再開発で1937（昭和12）年に遷移されたという経緯をもつ。そして、敗戦で日本が台湾を去った後、再び建立されたのである。

この廟の前には石獅子が置かれているが、これは神社時代の狛犬である。保存状態が良好なためか、愛嬌を振りまいているようにも見えてしまう。

壽天宮の主殿は1949年に建てられたものなので、古いものではないが、ここには日本式の神輿（みこし）が保存されているのでぜひとも目にしたい。

神輿が安置されているのは主殿のさらに奥にある後殿である。神輿は一対あり、両者とも、往時の姿を保っている。表面には金箔が貼られており、しっかりと磨き込まれているためか、黒光りしている。また、頂部には鳳凰が据え付けられ、存在感を示している。

この神輿は使用されることはなく、展示物のよ

うな扱いとなっているが、重厚感をしっかりと漂わせており、風格が感じられる。台湾で日本統治時代の神輿が残されていることは多くないので、岡山を訪れる際にはぜひとも足を運んでみたい。

写真３　壽天宮に安置されている日本統治時代の神輿。磨き上げられた姿が眩しい。

写真４　旧岡山神社の鳥居。完全ではないものの、往時の姿を保っている。

写真５　壽天宮は庶民信仰の場として参拝客が絶えない。廟の前に置かれた神社時代の狛犬が愛嬌を振りまいている。

鳳山～清国統治時代の水路が残る都市

鳳山　フォンサン（台湾華語・北京語）
鳳山　ふぉんそわ（ホーロー語・台湾語）
鳳山　ほうざん（日本統治時代の呼称）

台湾初の灌漑用水路と曹公廟

この一帯はかつて、パイナップルの産地として知られていた。昭和時代に入った頃から、南国・台湾の情緒を表現するものとして、パイナップル畑の様子が絵葉書やポスターに採用されることが多くなったが、その大半はこの辺りの様子だったと推測される。現在は宅地化が急速に進んでおり、以前とは様相が異なっているが、郊外に出れば、今もパパイヤやナツメ、バナナといったフルーツの栽培が盛んで、豊かな眺めとなっている。

清国統治時代、この地には曹公圳（そうこうしゅう）と呼ばれる灌漑用水路が整備されていた。これは台湾最古の灌漑用の水路であり、土地の高低差を利用した簡素なものではあったが、これが後の発展の礎となったのは言うまでもあるまい。

これを手がけたのは清国官吏の曹謹（そうきん）という人物だった。曹謹は私財を投じて、1838年に水路を拓いたとされている。当初、多くの住民は「風水が悪くなる」という理由で用水路の建設に非協力的だったという。しかし、完成後は見違えるように農業が発達し、感謝するようになった。1860年には曹謹を記念した祠が設けられ、曹公祠と名付けられた（後に曹公廟と改称）。

日本統治時代に入った後、1898（明治31）年には第４代台湾総督の児玉源太郎の指示により、改修と拡張が実施されている。この時には、台湾で最初の電動吸水が行なわれた。その翌々年、児玉自身が南部に赴いた際にも、この水路を視察している。この時にも大がかりな改修が決まり、現在の姿となった。

児玉以外にも何人かの要人がこの地を訪れており、曹公廟には第５代台湾総督の佐久間左馬太が

揮毫した扁額が残されている。曹公廟は駅からも近いので、訪ねてみたい場所である。

曹公廟に近い鳳明街という路地を入っていくと

写真 6　曹公圳は下淡水渓の下流域一帯を農耕地に変えた灌漑用水路。今もその流れを確認できる。

写真 7　パイナップルは昭和時代に入った頃から生産量が増えた。当時は鳳梨（おんらい）と呼ばれることが多かった。拙著『古写真が語る台湾日本統治時代の50 年』より

写真 8　曹公廟に残る扁額。第 5 代台湾総督の佐久間左馬太の名が見える。

写真 9　曹公廟は地域信仰の場として機能している。駅からも近い。

写真 10　城隍廟に置かれた旧鳳山神社の狛犬。狛犬は移設されて残っている。

城隍廟（じょうこうびょう）がある。ここには鳳山神社に置かれていた狛犬が置かれている。神社の敷地は現在、高雄市立鳳山医院となっているが、神社が廃社となった後、狛犬はここに移された。その経緯については不明だが、考証が待たれる。

なお、この廟の後方には日本統治時代に建てられた木造家屋が数多く見られたが、現在は再開発で一変している。

日本三大無線電信所にも挙げられた通信施設

鳳山には注目すべき戦跡も残っている。海軍鳳山無線電信所は 1917（大正 6 ）年に設けられた無線送信所で、海軍無線電信所としては太平洋戦争

開戦の暗号「ニイタカヤマノボレ一二〇八」を送信した千葉県の船橋送信所や、現在も巨大電波塔が残る長崎県佐世保の針尾送信所が知られているが、ここもそれに並ぶものとされていた。

海軍鳳山無線電信所は1919（大正8）年5月から業務を開始している。同月21日に通信開始の式典が開かれている。無線送信所としては、船橋送信所が首都圏、針尾が西日本と中国大陸方面、鳳山が帝国南部と南洋を管轄していた。いずれも当時としては最先端の技術を駆使したものであった。

訪れてみると、まずはその敷地の広さに圧倒される。奥まったところに管理事務所が見える。これは赤煉瓦造りで、装飾などは一切見られない。屋根は瓦屋根となっているが、低コストの量産型セメント瓦である。奥には同じく赤煉瓦を用いた水塔も見える。

米軍が作成した昭和20年当時の測量図を見ると、円形状の区画が不気味に浮かび上がっている。これは現在も同様で、航空写真を見ると、不自然な円形が鳳山の市街地のはずれに見えるはずだ。これは無線塔を囲んでいたもので、壁が設けられているためにこういった状況になっている。

管理事務所の後方には大きな建物が横たわっている。これは第一送信所で、巨大な倉庫、もしくは工場建築のように見える。ここには機材や電信設備が置かれていた。

大きくて厚い鉄門の存在も、ここが軍事施設だったことを物語っている。内部は吹き抜けになっており、天井が高い。足を踏み入れると、やや湿った空気が全身を包み込んだ。上部にはクレーンが残っており、プレートが確認できた。そこには「株式会社東京石川島造船所」、そして「大正六年」の文字が見えた。

敷地のはずれには第二送信所も残っている。ドーム型の建物を並列させたスタイルの第一送信所とは異なり、こちらは十字型をしており、東西南北に入口がある。こちらには一部ながら、配電設備や分電盤などが残されている。指令室や地下室、作業場なども残っており、廃墟ではあるものの、往時の様子が想像できる。

戦後は政治犯・思想犯の収容施設に

戦後を迎え、無線電信所は中華民国国民党政府に接収された。そして、無線送信所としての機能は停止され、名も鳳山招待所と改められた。招待所とは言っても、実態は海軍の工作隊が逮捕した政治犯や思想犯を拘禁する場所であり、多くの台湾人青年が苦難の日々をここで過ごした。

筆者は白色テロの受難者である張幹男氏を取材した際にこの場所の存在を教えられ、関心を抱いていた。張氏は「二度と思い出したくない場所」と渋い表情を浮かべたが、白色テロの時代、こういった場所で人生を奪われた青年たちが少なからずいたという事実を改めて思い知らされる。

現在は一般参観が可能となっている。竣工から一世紀を経た現在も当時の姿を留めている戦跡は少なく、そういった意味でも注目されている。MRT（都市交通システム）の鳳山国中駅から歩ける距離なので、気軽に訪れることができる。敷地

写真11　米軍作成の地図。「RadioStation」と記されている。図上にもはっきりと円形が見える。

写真 12　第一送信所。戦後は中華民国海軍が不審者を拘禁する場所として使用していた。洗脳や思想改造なども行なわれていた。

写真 13　2010 年 8 月 30 日、この敷地内に残る施設は国定古蹟に指定された。敷地内には防空壕なども残っている。

はとても広いので、時間を多めにとって訪ねてみたいところである。

写真 14　海軍無線電信所は船橋と針尾が知られていたが、それと並ぶ日本三大無線送信所の一つとして知られていた。

写真 15　第二送信所は屋内に通信施設の一部が残っている。厚い壁が重苦しい雰囲気を醸し出している。

九曲堂～東洋一と謳われた大鉄橋

九曲堂　チョウチュィタン（台湾華語・北京語）
九曲堂　かうくいたん（ホーロー語・台湾語）
九曲堂　きゅうきょくどう（日本統治時代の呼称）

台湾南部最大の河川と大鉄橋

高雄と屏東の間には下淡水（しもたんすい）渓と呼ばれた大河が流れている。この川の全長は 171 キロで、中部を流れる濁水（だくすい）渓に次いで台湾第二の長さを誇る。流域面積については

台湾で最大となっている大河川でもある。現在は高屏渓という呼称が一般的で、下淡水渓という名は公的記載には存在しないが、現在も老年世代を中心に旧称が用いられることが少なくない。

この川を跨ぐ橋梁は1913（大正２）年12月20日に竣工した。前例のない難工事であり、完成までには実に３年の歳月を経ている。翌年２月15日には台湾総督・佐久間左馬太の列席のもと、開通式典が盛大に挙行されている。

全長1526メートルという大橋梁は、阿賀野川鉄橋（1242メートル）や朝鮮の鴨緑江鉄橋（945メートル）よりも長く、日本最長となっていた。総工費は130万円。同時期に建設中だった台湾総督府庁舎（1919年竣工）の総工費が280万円であることを考えると、この橋梁がいかに大きな工事であったかが理解できる。余談ながら、台湾にはこの下淡水渓橋以下、大甲渓橋（1213メートル）、大安渓橋（914メートル）、淡水河（889メートル）、濁水渓橋（889メートル）などの大鉄橋があった。

この橋は主構造にトラスを採用している。トラスとは複数の三角形を組み合わせたもので、台湾では造れなかったため、日本で製造されたものが高雄と基隆の両港に運び込まれた。

24連ものトラスが延々と続くその姿は、誰をも圧倒したという。竣工時、多くの鉄道技術者たちが視察に訪れたというが、例外なく称賛の言葉を残したと言われている。

トラスを支える支柱は山口産の石材と煉瓦を混用して外郭を作り、内部にコンクリートを流し込むという手法が採られている。これは増水期を見越した設計で、約12メートルの深さまで埋め込まれていた。流水量の変化がここまで多い河川は日本本土では見られないため、独自のものが研究され、実用化された。

この橋梁が果たした意義は大きかった。これまで下淡水渓によって隔絶されていた屏東（へいとう）地方は、新興の産業都市・高雄と直接結びつくようになった。広大な平野で栽培された農作物は鉄道を利用して高雄へ運ばれるようになった。そして、この時期、高雄港には主にインドネシアからボーキサイトが持ち込まれるようになり、アルミニウム工業が発達した。これによって、屏東産のパイナップルを用いた缶詰が大量生産されるようになり、その大半が日本本土へ運び込まれていった。

九曲堂（きゅうきょくどう）駅を出た列車はしばらくすると、この鉄橋のすぐ脇を走る。現在、使用されているのは戦後になって付け替えられた複線式の橋梁で、その脇にあるのが戦前に架橋された鉄橋である。この老鉄橋のトラスは腐食が進んでいたため、1964年に付け替えられたが、橋梁その

写真16　鉄道遺産として保存されている旧橋梁。現在、河川敷は公園として整備されている。残念ながら、現在は中程の橋脚が洪水により、流されている。

写真17　トラスが連なる様子。日本統治時代の名は下淡水渓橋梁であった。屏東地区の発展に大きく貢献した。日本統治時代に発行された絵はがき。

ものは一世紀を超える歴史を誇っている。現在は鉄道文化遺産として政府の認定を受けている。

完成を見ずに他界した技師

鉄橋を渡る手前に位置する九曲堂駅は1907（明治40）年10月1日に開設された終着駅である。言うまでもなく、この先、下淡水渓に行く手を阻まれていたため、終点となっていた。

駅舎を出て、右手に進んでいくと、古めかしい石碑が残っている。これは下淡水渓鉄橋の架設に奉職した飯田豊二という技師を記念したものである。

筆者が最初に訪れた1998年当時は深く生い茂った林の中にあり、石碑はバラックの中に埋もれていた。保存状態は決して悪くなかったが、その場所は非常にわかりにくく、探し出すのに難儀した。

現在は不法建築がすべて撤去され、繁茂していた樹木も伐採されている。石碑を中心とした記念公園が整備され、石碑の由来を中国語と英語、そして日本語で記した案内板が設置されている。

石碑の正面に立ってみると、碑面には「記念碑」と三文字だけが刻まれ、非常にシンプルだ。台座には縦44センチ、横69センチのプレートが埋め込まれている。ここには漢文で建碑の経緯が記されている。

それによると、飯田技師は静岡県生まれで、1897（明治30）年、28歳の若さで台湾へ渡っている。1910（明治43）年には正式に台湾総督府鉄道部技師となり、翌年から鉄道部の打狗（高雄）出張所に属する技師として下淡水渓の架橋工事に携わった。しかしながら、過労がたたって病に倒れ、自らが手がけた鉄橋の完成を見ることなく、1913（大正２）年６月10日、台南市で世を去ったという。享年40歳だった。

その後、台湾総督府鉄道部は彼の功績をたたえ、この碑を建てた。1987年４月には複線式の新橋梁が完成し、旧鉄橋は役目を終えたが、屏東地区の発展を支えた功労者として、1997年４月に産業遺産としての保存が決まった。2005年７月には大型台風が台湾南部を襲い、橋梁の一部が破損。橋脚のいくつかが流されてしまったが、現在は河川敷が公園として整備されている。

石碑は列車からも見ることができるので、高雄から屏東へ向かう場合は、ぜひとも車窓左手に注目したい。

写真18　架橋工事に奉職した飯田豊二を記念する石碑。郷土史に興味を持った人々がこの石碑を訪れることも増えており、鉄橋とともに歴史遺産の扱いを受けている。

高雄市民の生活を支えた取水口

下淡水渓橋梁の周辺は緑地整備されており、河川敷が公園となっている。台湾では産業遺産に対する関心が高く、行楽客が憩う姿をよく目にするが、こういった訪問者たちがすぐ近くに位置する竹寮取水站を訪ねることはほとんどない。

ここは大正時代に整備された取水施設である。設置が決まったのは1910（明治43）年。４カ年事業として整備が進められた。竣工は1913（大正２）年12月。同月から供水が始められた。高雄の水道水はここから送られ、多くの人口を支えてきたのである。

当初は高雄の未来人口を４万人に想定していたという。しかし、高雄の人口は縦貫鉄道の開通や築港完了などによって激増したため、大正５年以

降、何度かの拡張工事が行なわれている。それでも供給は追いつかず、未来人口を 10 万人とした大規模な拡張工事が行なわれた。

この工事は 1930（昭和 5）年から 2 カ年計画で進められたが、自然災害に襲われたり、国庫からの補助減額に遭ったりしたため、完成は遅れた。結局、完成は昭和 8 年 3 月を待たなければならなかった。さらに、昭和 11 年 8 月 29 日、高雄市は 30 年後にあたる 1965 年の未来人口を 40 万人とする大高雄市都市計画を立てた。これに合わせ、水源地も昭和 13 年より、さらに大規模な拡張工事を進めることになった。これは昭和 16 年に完成し、現在の姿となった。

訪れてみると、赤煉瓦の壁面が強い陽差しに照らされている。敷地内にはいくつかの建物が並んでおり、いずれも大きなものである。行楽客の受け入れ体制はできていないが、敷地内を見学することは可能となっている。

写真 19　取水口は行楽地ではないものの、幹線道路沿いにあるので、気軽に訪問できる。正式名称は竹寮取水站。

写真 20　ポンプ室の様子。現在も高雄市民の水瓶として機能している。

旗山～河岸段丘上に開けた都市

旗山　チーサン（台湾華語・北京語）
旗山　きーさん（ホーロー語・台湾語）
旗山　きーさん（客家語）
旗山　きざん（日本統治時代の呼称）

バナナとさとうきびで知られた町

旗山（きざん）はかつて、蕃薯寮（ばんしょりょう）と呼ばれていた都市である。旗山渓によって形成された河岸段丘の上に集落が開けており、山容秀麗な旗尾（きび）山と下淡水渓（当地では旗山渓と呼ばれる）の流れで知られ、台湾十二勝の一つにも挙げられていた。

この地域はバナナとさとうきびの栽培で知られていた。バナナは山肌を利用して栽培され、平地はさとうきびの単作地帯となっていた。いずれも日本統治時代に大きく発達し、戦後の高度成長期に衰退したが、製糖工場は現在も残っており、敷地内で販売されるアイスキャンディーが名物となっている。バナナについては生産量こそ減っているが、最近はバナナを加工した商品の開発が熱心に進められ、地場産品として注目されている。

旗山を散策するにあたって、最初に訪れたいのは旧旗山駅である。ここは九曲堂から伸びていた製糖鉄道の駅で、ここを中心に旗山の町並みは形成されている。残念ながら、鉄道そのものは廃止されているが、旗山のメインストリートである中山路はここを起点に直線に市街地を貫いている。駅周辺には旅館や雑貨屋がわずかながらも残っており、往時の雰囲気を感じとることもできる。

さとうきびの運搬を担った鉄道

この鉄道は屏東（へいとう）に本社のあった台湾製糖株式会社によって運営されていた。九曲堂から美濃（みのう）の竹頭角（ちくとうかく）に到るまでの39・4キロ。旗山は沿線の中で最も賑やかな町だった。

製糖会社が経営する路線だけあって、この鉄道はさとうきびの運搬を目的に敷設された。しかし、しばらくすると、需要に応える形で旅客輸送も始められた。ほかに交通機関と呼べるものがなかった時代だけに、住民にとっては重要な移動手段であった。

旗山の駅舎は小さいながらも独特な風格を漂わせている。建築デザインの世界では左右の対称性が重視されていた時代、ここは異例とも言うべき左右非対称のデザインとなっていた。用材には阿里山の紅ヒノキが用いられたという風聞も存在するが、実際には杉が用いられた。なお、正面左手の八角形の屋根を持った部分には待合室があった。

旗山に限らず、台湾の製糖鉄道は1970年代から製糖事業の不振とモータリゼーション（車社会化）のあおりを受け、次々に姿を消していった。ここの場合も1978年に営業をやめ、1982年には線路も撤去されてしまった。駅舎は放置され、侘びしい姿を晒していた。もともとが瀟洒なデザインだったこともあり、その様子は痛々しいものだった。

この駅が開業したのは1910（明治43）年8月20日。そして、鉄道が廃止されるまで、この駅舎は常に旗山の玄関口だった。当初は蕃薯寮駅として開設され、1920（大正9）年に地名改正に伴って旗山駅となった。なお、起点の九曲堂駅からは28・5キロの距離にあり、所要時間は1時間半だった。

現在、駅舎は高雄市が指定する古蹟に指定され、保存対象となっている。修復工事を経ているためか、それほど古さは感じられないが、町の玄関口として長らく機能してきただけあって、しっかりと風格を保っているように見える。

なお、製糖工場は川を挟んで対岸の旗尾に設けられていた。この工場は1910（明治43）年に高砂製糖株式会社旗尾製糖所として創設されたが、後に鹽水港製糖株式会社に売却。しかし、1927（昭和2）年には同社の経営も悪化し、台湾製糖株式会社に移管された。

旗山の砂糖は高品質で知られており、台湾総督府や皇室に献上されたこともあったという。これは「献上糖」と呼ばれ、地域の誇りとされていた。

工場そのものは2003年に操業を止めているが、今も事務所や購買部などがあり、ここで自家製のアイスキャンディーが売られている。アズキ味からタロイモ味、ミルク味、パイナップル味まで10種類近くあり、中にはタロイモ味のような日本では見られないものもあるので、試してみてはいかがだろうか。

写真21　現在の旗山駅の様子。線路はすでに剥がされているが、駅舎は修復工事を経て公共空間となっている。

旗山の「老街」を散策

駅舎の正面からのびる中山路がこの町のメインストリートである。バロック風の装飾を正面に施した家屋が並び、壮観な眺めとなっている。これらは大正から昭和にかけて建てられたもので、こういった家並みを台湾では「老街」と呼ぶ。ここ

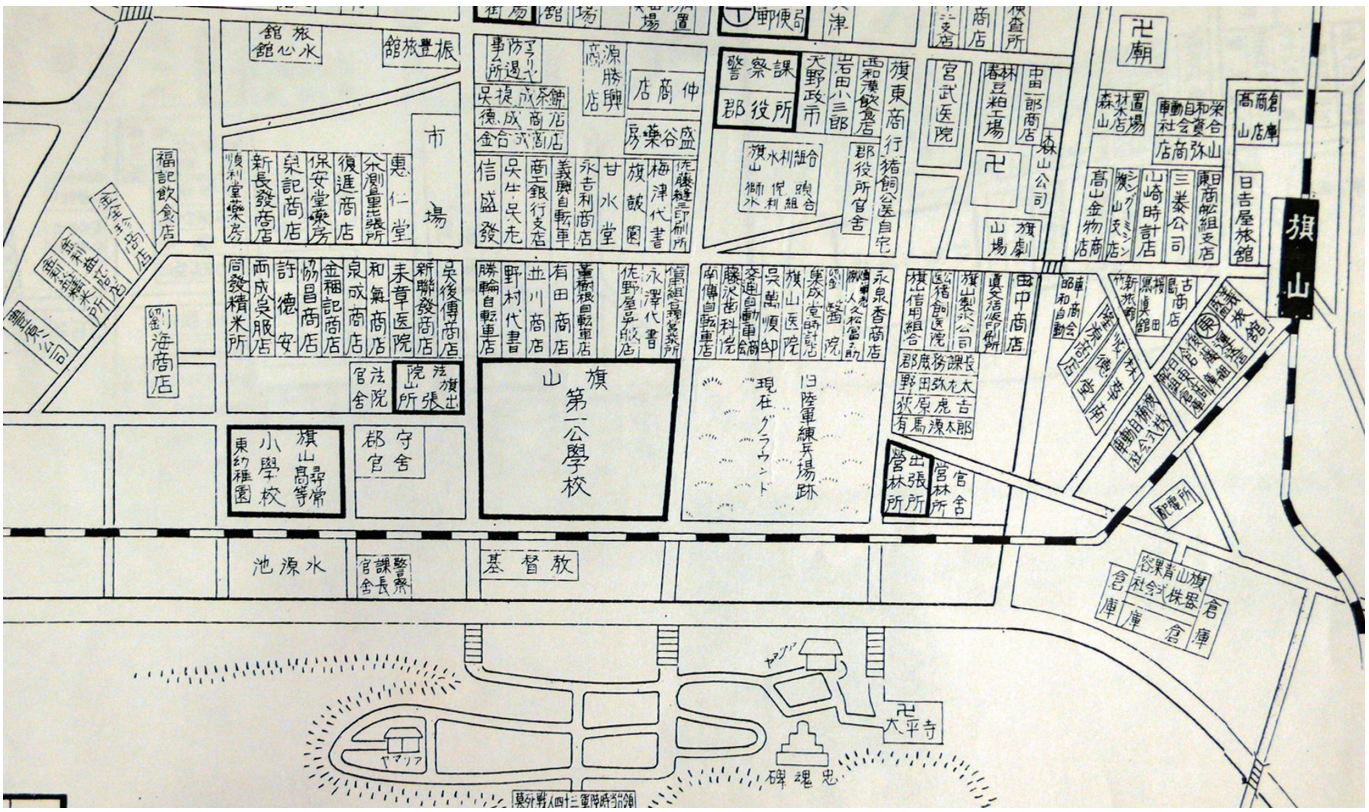

写真 22　日本統治時代に発行された地図。駅舎の前を走る道がメインストリートで、現在は中山路と呼ばれている。

写真 23　メインストリートとなる中山路にはバロック風の装飾を施した商店建築が並ぶ。商店に倉庫と住居が付随しているのが特色となっている。

写真 24　旗山の家並み。古くから商業都市として栄えていた旗山だが、日本統治時代の都市計画によって一変した。その様子は台湾十二勝にも挙げられていた。『日本地理大系』より

に限らず、各地で見られるが、旗山は中でも保存状態がよく、多くの行楽客が訪れる。

この老街を進んでいくと、左手に 1817 年に開かれた旗山天后宮がある。この廟は媽祖を祀り、正殿は老街に背を向けるように建っている。これは旗山の市街地が日本統治時代に都市計画で整備されたことによる。つまり、元来の集落は廟の前方にあったが、廟の背後に日本人が新しい市街地を造ったため、廟は目抜き通りに背を向けているような形になったのである。

なお、この一帯には味自慢の屋台や食堂が並んでいる。中でもアヒル肉を漢方薬で煮込んだ「當

歸鴨肉」は旗山名物として知られている。少々クセはあるものの、ぜひとも試してみたい郷土美食だ。麺とともに供する店が多い。

その先、華中路との交差点には旗山が誇る名物店「枝仔冰城」がある。ここは全島で知られたデザート店で、かき氷やバナナキャンディーなどで知られる。中でも「芋仔聖代(タロイモサンデー)」は人気が高い。

武徳殿と公学校

華中路を左折すると、左手に旗山武徳殿が見えてくる。ここはかつての武道教練場で、竣工は1934（昭和９）年。戦後は長らく警察署として使用されていたが、武徳殿としての姿は留めていた。しかし、1994 年 10 月 16 日に火災が起こり、壁面と鉄筋コンクリート構造の部分を残して灰燼に帰してしまった。

それでも、建物を修復し、郷土のシンボルにしようとする運動が市民から起き、これを受ける形で 2000 年 7 月から修復工事が始まった。この工事は翌年には完成したものの、日本式の黒瓦を台湾で入手するのは困難だったため、屋根に透明なガラス板が貼り付けられてしまった。完成後はカフェ・レストランとして使用されていたが、その外観はミスマッチな印象を拭えず極めて不評だった。

後に、本来の姿に復元してこそ、歴史を後世に伝えていく意義があるという声が上がり、再度、修復工事が施されることになった。

この工事は 2014 年 12 月 21 日に終わり、現在は竣工当初の様子に戻っている。建物の後方には日本統治時代の教官が暮らした木造家屋もあるので、こちらものぞいてみたいところである。

旗山武徳殿の向かいにある旗山国民小学には日本統治時代の講堂が残っている。こちらも一見の価値があるので紹介しておきたい。この学校の歴史は古く、1898（明治 31）年 10 月 7 日に蕃薯寮公学校の名で開設された。台湾が日本の統治下に入ってわずか 3 年後のことである。

この学校の校舎は日本統治時代のものが残っており、講堂とともに保存対象となっている。校舎は大きな建物ではないが、2000 年 5 月 31 日に古蹟の認定を受けた。

講堂は 1934（昭和９）年 12 月 5 日に竣工したという記録が残る。使用されたのは翌年からだったが、当時は旗山を代表する大型建築だったため、学校行事のみならず、式典や集会などがここで行なわれたという。長年、風雪に晒されていただけに建物の傷みは大きかったが、現在は改装工事を経ており、美しい外観を取り戻している。

写真 25　旗山武徳殿。武徳殿は日本統治時代、ある程度の規模の都市であれば、どこでも設けられていた。現在もいくつかの武徳殿が往年の姿を保っている。

写真 26　かつての旗山武徳殿の様子。屋根に貼られたガラス板が不釣り合いな印象だった。2006 年撮影。

写真 27　旗山には公学校のほかに内地人子弟が通うことを前提に設けられた尋常小学校もあった。こちらも校舎は残っており、公共スペースとなっている。

旗山神社の遺跡

旗山の市街地を見おろせる丘は「鼓山公園」と呼ばれている。ここには旗山神社が設けられ、公園全体が神苑となっていた。

神社の鎮座式は 1936（昭和 11）年 10 月 30 日に挙行された。そして、毎年 11 月 10 日に例祭が執り行なわれた。ここは眺めの良さで知られ、神社から眺めた旗山の家並みは絵はがきにも取り上げられ、神社そのものが景勝地の扱いを受けていた。

この神社の規模は大きかった。これも先述した岡山のケースに酷似しているが、創建年代が皇民化運動に合致するため、神社の施設は大掛かりなものとなっていた。

旗山神社の場合、台湾全土を見回しても、ここまでの規模を誇る神社は多くない。本殿や拝殿については痕跡を残していないので、往時の姿は古写真に残るばかりだが、やはり、大きな建物だった。

敗戦によって日本人が引き揚げた後は管理されることもなく、神社関連施設は荒廃していたという。新たな統治者となった国民党政府は排日政策を推し進める中、石灯籠を破壊し、敷地には孔子廟を建てた。神苑は公園となったが、ここがかつて神社だったという史実は意図的に覆い隠されていた。

現在、敷地の片隅に日本統治時代の石碑が残っている。これは台湾総督・佐久間左馬太が揮毫した「精忠護国」と刻まれた石碑である。表面は苔むしているが、保存状態は悪くない。国民党政府は「伯爵佐久間左馬太」の文字をセメントで埋めていたが、半世紀以上の歳月を経て、今は判読が可能となっている。

さらに、近くにはやはり日本人の手で設けられた「駐軍記念碑」も残っている。こちらは樹木に埋もれた形になっているが、保存状態は良好で、はっきりと文字も判読できる。

次回は高雄市美濃と山岳部地域を紹介してみたいと思う。

写真 28　旗山の家並み。右手に広がるのは旧陸軍練兵場。中ほどに見えるのは旗山公学校の講堂。のちに手前に旗山武徳殿が建てられた。『日本地理風俗大系』より

写真 29　鼓山公園は旗山神社が鎮座していた場所で、敷地全体が神苑とされていた。中央の奥に見えるのは旗尾山。日本統治時代の絵はがき。

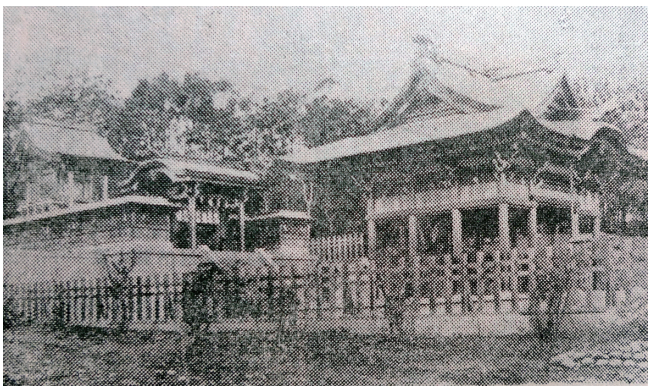

写真 30　旗山神社は大国魂命、大己貴命、少彦名命、北白川宮能久親王と安徳天皇を祀っていた。石灯籠は一度、国民党政府の独裁時代に破壊されたが、再整備されている。

写真 31　佐久間左馬太総督が揮毫した「精忠護国」の碑は今も姿を留める。

写真 32　精忠護国の碑の近くには駐軍記念碑も残っている。

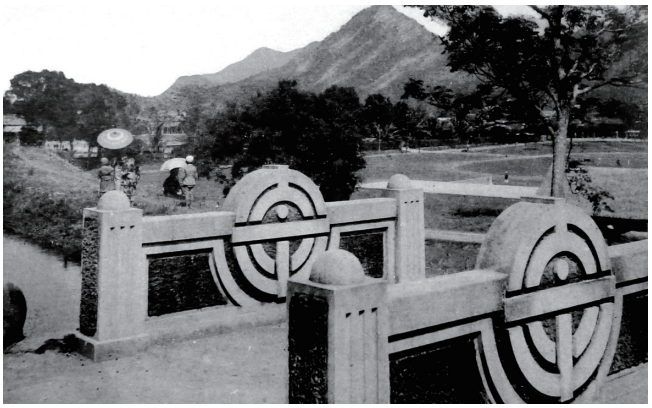

写真 33・34　太平寺前の橋。霊鼓山太平寺は明治 42 年 12 月、旗山神社の脇に開かれた。本堂の前には水路があり、これは現在も見ることができる。

片倉佳史　（かたくら よしふみ）
1969 年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた台湾のガイドブックはのべ 35 冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けるほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『旅の指さし会話帳・台湾』（情報センター出版局）、『台湾に残る日本鉄道遺産』（交通新聞社）など。2012 年には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』（宝島社）を手がける。最新刊は台北生活情報誌『悠遊台湾』。『観光コースでない高雄・台南編』（高文研）を近刊予定。
ウェブサイト台湾特捜百貨店　http://katakura.net/